

ほかの植物たちと競合しない見事な生存戦略

文・写真

楠田純一くすだじゅんいち

兵庫県姫路市立安富中学校教頭

# 人の暮らしに密着するヒガンバナ

ヒガンバナという秋のお彼岸のころの真っ赤な姿を思い起こすでしょう。では、春を前にしたこの季節、ヒガンバナが何をしていますか？ なぜ、あぜ道に広がっているのでしょうか？ 今回はヒガンバナの「ふしぎ!」を紹介します。

## ヒガンバナには葉がない？

私が人里の植物の代表のような「テクサレ」（私の郷里、兵庫県福崎町ではヒガンバナをこう呼んでいました）の「ふしぎ!」を追いかけるようになってからどれほどの歳月が経つでしょう。その折れやすい茎（花茎）を折って首飾りにしようとしたら、「それ触わったら手が腐るで！ だから『テクサレ!』」だと初めて教えてくれた母は、昨年の夏、遅れたヒガンバナの開花を待たずに他界してしまいました。

うと苦手な単元と敬遠していました。ところが、「光合成」のことを授業でやってみて、植物がとても面白い生きものであると思えてきました。光と水を求めての暮らしが、動物以上に劇的に見えてきたのです。

そんなころでした、「第一のふしぎ!」に出合ったのは。秋のお彼岸のころになると田んぼのあぜ道に赤く燃え立つような「松明の行列」をつくるヒガンバナ。今まで何も見られなかったあぜ道や土手に、ある日突然、花のつぼみがニョキッと顔を出したかと思うと、茎を数日で50cmぐらいいまでスルスルと伸ばして、ほぼお彼岸にきっちり開花するのです。じつとその姿を見ていると、何かがおかしいです。そこには、植物を植物たらしめている「緑の生産工場」である葉がないのです。

葉で栄養を生産しないのならば、一日に10cmも茎を伸ばすエネルギーは



▲秋のお彼岸の時期、真っ赤な花を咲かせ、あぜ道に「松明の行列」をつくるヒガンバナ（2010年9月30日兵庫県福崎町にて）。  
▼真冬は葉を伸ばして「緑の行列」に（2010年12月23日同地にて）。



【参考文献・資料】『日本植物方言集成』（八坂書房 編）、『日本のひがなばな』（松江 幸雄著 文化出版局）、『ヒガンバナの繁殖～32年目の株を掘る～』（松江 幸雄著 『遺伝』 裳華房VOL.51 NO.4）、『ヒガンバナの博物誌』（栗田子郎著 研成社）※一部、ウェブサイトで「ヒガンバナの民俗・文化誌（<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~lycoris/higanbana-minzoku.bunka-1.html>）」にて公開



↑3月、ほかの植物が葉を出すころ、枯れ始める。(2010年3月20日)

春



↑5月、完全に枯れ、草に覆われる。この後、地上から姿を消し、夏を迎える。(2010年5月22日)

夏



↑9月後半、蕾が地面から顔を出す。(2010年9月25日)

↓あつという間に茎を伸ばし始める。(2010年9月28日)



↑真冬、雪にすっぽり埋もれても葉っぱは青々としている。(2011年1月16日)

冬

## ヒガンバナの一年間の生活史

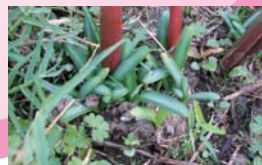


↑次々と開花。(2010年10月4日)

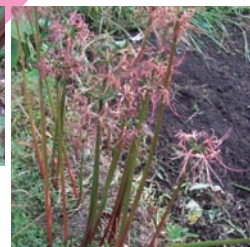


↑蕾が顔を出してから5日後、赤い花びらが見え出す。(2010年9月30日)

秋



↑花が枯れ始めると、足元から葉っぱが出てくる。(2010年10月14日)



↑すっかり葉の季節。(2010年11月14日)

←花は完全に萎れ、葉が勢いよく伸びる。(2010年10月24日)



### 付いた里名は1000以上!

『日本植物方言集成』では、555ものヒガンバナの各地の呼び名が紹介されています。研究者によつては、1000以上の名を挙げている人もいます。この膨大な数の意味するところは何でしょう。それは、それだけ人々の暮らしと深く結び付いていたからではないでしょうか。昔の人々もちゃんとヒガンバナを観察してしま

どこなのでしょう。答えは、花が咲いた後も観察を続けてみてすぐ分かりました。花の時期を過ぎると茎の足元から続々と葉が伸びてきます。そうです、ちゃんと葉はあるんです。

### 種子はできなくとも増え続ける

た。「ハッカケバナ」「ハッカケ」「ハコボレ」などの呼び名をみるとよく分かります。極め付きが「ハミズハナミズ(葉見ず花見ず)」。これまた見事な観察眼です。

この「第二のふしぎ!」は、私たちにたくさんのお話を教えてくれます。種子が増えるわけではないとすると、種子が遠くへ飛んでいくとか、動物たちが食して運ぶということもないわけです。では田んぼのあぜ、小川の土手、住居の周りの空き地、墓地など、人里の至る所でヒガンバナの開花を見るこ

さらに観察を続けると群生地は緑で覆われていきます。それは春まで続きます。秋から冬にかけて、ほかの植物が枯れていく中、たつぷりと光を独り占めです。光合成をいっぱいして、地下の栄養タンクである球根(鱗茎)にエネギー源をため込みます。そして春、ほかの植物が芽を出し背丈を伸ばすころに葉を枯らし、休眠に入り、秋のお彼岸を待つのです。「花の季節」「葉の季節」「休眠の季節」と一年中、ほかの植物たちと競合しない見事な戦略です。これを知ったとき、私はこれほど植物の生存戦略を具現化した優れた教材はないと思いました。

\*1: 通常、花が咲く植物の細胞内の遺伝子は2組の染色体群で構成され、このような生きものは2倍体と呼ばれ、染色体群が3組あるものを3倍体という。3倍体は配偶子をつくるための減数分裂のときに奇数となるので正常な分裂が起きず、配偶子ができず、種もできない。

▼2005年11月20日に見つけたヒガンバナの種子もどき。萎れた花びらの後からとどき子房が膨らみ種子らしきものができることがある。この後、土中に埋めてみたが、変化はなかった。



▲すごい勢いで分球し、増えていく。親株から球根がずり落ちて、下の田んぼに広がって葉を出している。(2010年10月30日)

## ヒガンバナの里名 (本文中にてできた里名のみ)

ハッカケ	静岡 (富士)
ハッカケバナ	群馬 (群馬)、神奈川 (津久井)、静岡 (富士・田方・駿東)
ハコボレ	東京 (八王子)、神奈川 (津久井)、静岡 (賀茂・田方・駿東・富士)
ハミズハナミズ	石川県 (加賀)、青森 (上北)、富山 (東砺波)、奈良 (磯城)
テクサレ	大阪 (大阪)、兵庫 (飾磨)、山口 (玖珂)
テクサリ	奈良 (吉野)、兵庫 (神戸市・神崎・津名)、和歌山 (日高)、山口 (大島)
シビレバナ	兵庫 (赤穂)
シタマガリ	愛知 (尾州)、滋賀 (群馬 (山田)、富山 (東砺波)、愛知 (知多・中島)、三重、京都 (与謝)、鳥取 (西伯・東伯)
チハキグサ	岐阜
シビラ	兵庫 (佐用)、岡山 (苫田)

とができるのはどうしてでしょう。それは、人為的に運ばれたか、農耕作業などによる地表のかく乱、あるいは洪水などによる河原のかく乱によって分布を拡大していったとしか考えることができないのです。だから、各地でヒガンバが根づいた経緯を少し詳しくたどれば、それぞれの地の「ヒガンバナ物語」を発見できるのです。

なぜ人為的に運んだのでしょうか。あの面では人々に忌み嫌われてきたヒガンバナですが、実は有用植物としての歴史を持つのです。利用方法のひとつは球根が「食用」となったことです。元来、球根にアルカロイドを含む有毒植物ですから、水晒しを行って毒抜きをする必要があります。だから「救荒食」「代用食」が中心だったようです。

それでも、多くの人の生命を救った歴史を持つているのも確かです。

ほかに、球根のデンプンを利用して「糊料」、球根を利用して「民間薬」「製薬原料」、葉を利用して「温床(温かくした苗床)の発熱材」「農作物の運搬貯蔵梱包材」にしたり、土手・あぜに植えて毒性を利用して「ネズミ・モグラ除け」にしたりなど多岐に渡っていたようです。このように人々の暮らしや農業と深いかわりを持った植物だったのです。それは、呼び名の中に「テクサレ」「テクサリ」「シビレバナ」「シタマガリ」「チハキグサ」「シビラ」などがあることが物語っています。

では、この日本のヒガンバナはいつどこからやってきたのでしょうか。これについては、まだはっきり解明されておらず、縄文時代もしくは弥生時代、奈良時代ないしは平安時代、など諸説あるようです。

## ネットで集まったヒガンバナ情報

今はインターネットの時代です。そこで私は、インターネットを利用してヒガンバナの「ふしぎ!」を追いたいと思います。1998年から毎年「ヒガンバナ情報」(\*2)のページをつくり、情報発信・収集を続けてきました。また2007年よりネット上に「日本ヒガンバナ学会」(\*3)というコミュニティ

イサイトまで立ち上げてしまいました。昨年には短文投稿サイトの Twitter (Higanbana) も使って全国のヒガンバナ情報を教えてもらいました。こうした情報収集で、例えば昨年の開花は、例年より全国的に10日以上遅れたことが分かりました。では、開花時期は何によって決まるのでしょうか。昨夏の猛暑・低雨量が影響しているのでしょうか。情報交換をする中で、「球根の中での花芽の分化・発達には温度(特に地温)が深く関係する」ということ、「茎が伸びるには、土壌中にたっぷり水分が必要」なことが分かりました。

また、めったにないはずのヒガンバナの種子を入手し、それらを何年もかけて発芽させて育てているというお二人の方からの貴重な情報もいただきました。ただし、そのヒガンバナが2倍体に変化したものなのかはまだ確かめられていません。まだまだ「ふしぎ!」は続くのです。多くの人の観察情報から進められる研究は、これまでには見られなかったような新たな展開の可能性も予感させてくれます。

人里にヒガンバナが群生する風景は日本の秋の風物詩であり、私たち農耕民族の原郷です。ヒガンバナの「ふしぎ!」を追うことは、必ずやこの原郷の自然保護育成につながるものと考え、今後も続けていこうと思います。

\*2: 「ヒガンバナ情報2010」 <http://homepage3.nifty.com/kusudadb/Higan/2010higan/higan2010.html>

\*3: ソーシャルネットワークサービスmixiのコミュニティとして展開。誰でも入会可能。